

# すべての在日被抑圧民族と戦争被害者は団結して プロレタリア国際主義の旗を高く掲げよう！

## 北朝鮮「拉致」問題の本質を論ずる

二〇〇二年九月の日朝会談で、北朝鮮の金正日政権は日本人「拉致」を告白した。以後、「拉致」問題は軍国主義復活をすすめる日本独占資本と国家権力を勢いづけ、日本ナショナリズムの未曾有の沸騰をもたらしている。左派系誌『現代思想』が二〇〇三年三月号で「テロとは何か」を特集したが、「北朝鮮＝日本」問題は試金石と指摘したただひとりを除く論者たちはみなアメリカ批判は書いて

一九四五年八月、日本軍国主義は中朝アジア人民の抵抗戦争に敗北し、崩壊した。しかし治安・弾圧機関など国家権力を根こそぎ破壊して新しい社会として歩み始めたのは、毛沢東の中国によって解体された傀儡「満州国」のみで、日本にも韓国にもブルジョア権力は生き残り、北朝鮮にもかたちをかえて朝鮮総督府方式の支配が生き残った。崩壊した軍国主義と残存したブルジョア国家権力、この矛盾が、戦後日本に刻印された。つまり、戦争状態を終わらせ、戦争責任の謝罪と戦時補償を求める闘いが旧宗主国日本における戦後階級闘争の根源的で基本的な課題となった。対台湾で一九五二年日華

還に関する日朝協定」の本質はここにあった。事実、一九四九年の団体等規正令による朝連など四団体への解散命令、同年の外登録の常時携帯義務と切替制度導入、翌五〇年の大村収容所開設、五二年の第一次日韓会談開始、五八年の大村収容所からの第一次強制送還という一連の歴史が如実にその本質を物語る。戦犯ヒロヒトは処刑も退位も逃れ、ブルジョア独裁は、朝鮮戦争、ベトナム戦争の「特需」を梃子に第三世界から収奪した超過利潤で抵抗勢力を買収、労働費を削減して養い、アメリカの目下の同盟国として軍国主義復活へ歩んだ。韓国では建國時から経済建設路線を自力更生による人民の総合力の育成をめざすのではなく、復讐心からする冒険主義的な「仕送り」政策に頼り、そのため帰国運動をすすめた。日本の左翼運動もまた贖罪意識からこれを無批判的に支えた。当時翼賛的に掲げられた「人道」の旗じるしは、この棄民政策の隠蔽であり、五九年の「帰

源を収奪、移動の制限と禁止や鉱物資源の徹底採掘など、日本の植民地支配の手法そのままに人民を抑圧しつづけている。北朝鮮の国家権力による日本人「拉致」は、日本人に対する憎悪にもとづく「左翼的」報復であり、われわれはここにも日本の植民地支配の傷あとをみなければならぬ。六五年日韓基本条約は日本の戦争責任を経済決着方式で免罪、日韓条約反対闘争は敗北した。その後六八年に金嬉老は単身決起、金嬉老の告発は、植民地支配とその後もつづく差別を謝罪、補償しようとする日韓の国家に対する抗議であるだけでなく、戦争責任や在日朝鮮人の法的地位問題を闘い得なかった日本の左翼運動への抗議であった。告発された質は日本の左翼運動に色濃く存在し、明確な思想的総括として提示されるのは七〇年の七・七華僑青年闘争委員会の告発に待つ。日本の左翼運動には卑屈に卑下した贖罪と随伴の傾向が、政治利用主義か、しかなかったがゆえに敗北を重ねたのである。

対韓国で六五年日韓基本条約まで二十年、対北朝鮮では昨二〇〇二年の平壤宣言までですら五十七年戦争状態が継続された（平壤宣言は日韓条約同様、戦争責任を免罪し、日本に屈服したという階級的性格をもつ）。日韓会談反対闘争を六〇年安保につぐ国民運動と位置づけながらも、その論理は「五億ドルあれば石炭問題などが賄える」（一九六二、日本社会党）という一国主義的で経済主義的な主張に終始し、日本の左翼運動は権力による分断を助けた。結果、戦争責任に類かむりした日本の国家権力と政府は、何らの謝罪も補償もおこなわず、今なお在日朝鮮人民はじめ在日外国人に対する排外的入管政策と棄民

という問題でもある。佐藤のたどってきた歩みのなかに、われわれは日本の社会運動、左翼運動の思考回路の典型をみることが出来る。佐藤は、運動も人間も誤りをおかしてはいけない（誤りを犯さない人間は何も仕事をしない人間である！）との前提に立つ。対する竹内の前提には、人間にも歴史にも誤りはつきものであるという認識がある。佐藤は、朝鮮への贖罪意識から運動を始め、しかし、北の過ちに気づくやいなやそれを断罪し、憎悪するようになる。そして、自らの消したいが消せない過ちをも潔癖的に断罪し、

## 戦後階級闘争における戦争責任問題

一九四五年八月、日本軍国主義は中朝アジア人民の抵抗戦争に敗北し、崩壊した。しかし治安・弾圧機関など国家権力を根こそぎ破壊して新しい社会として歩み始めたのは、毛沢東の中国によって解体された傀儡「満州国」のみで、日本にも韓国にもブルジョア権力は生き残り、北朝鮮にもかたちをかえて朝鮮総督府方式の支配が生き残った。崩壊した軍国主義と残存したブルジョア国家権力、この矛盾が、戦後日本に刻印された。つまり、戦争状態を終わらせ、戦争責任の謝罪と戦時補償を求める闘いが旧宗主国日本における戦後階級闘争の根源的で基本的な課題となった。対台湾で一九五二年日華

## 求められる日韓闘争敗北の思想総括

この分岐はいったいどこにあるのか？ここで、われわれは、佐藤の対極に位置する竹内好（一九一〇・七七）の思想を検証しておきたい。なぜなら一九六五年日韓闘争敗北の検証と反省とは、六五年になぜわれわれは、日朝関係における竹内好を日朝関係において作り出せ